

神奈川県立金沢養護学校



学校だより

第69号 平成24年12月20日

キャリア教育 (11)

副校長 渡邊昭宏

学ぶということは「真似る」ことだといわれます。正しい手本やよいモデル(情報)を見て、そのとおりにやれる(活用)ように繰り返し練習すれば身につくことはたくさんあります。その際どこにポイントを絞って見ればよいのか、モデルとどこが違うのかということをお子さんの能力に応じた方法で支援してあげることが大切です。

また、赤信号で渡ったり、猫の手にしなくて包丁を扱ったりという誤った手本や悪いモデルを見て、そんなことをしたら危ない・いけないと気づくことで学ぶこともあります。こうした場合は、その先の悪い結果(将来)を予測(設計)して思いとどまったりやめたりすることですが、悪い結果を実際に体験させるわけにはいかないので、アニメーションなどでしっかり説明(疑似体験)して理由を納得させることが大切です。

もし、やり直しが可能ならば、失敗しながら試行錯誤で学ぶのが一番身につきます。葛藤の中で判断し修正していくことで意思決定の力が培われます。この場合は手本やモデルをあえて示さず考えさせる時間を与えて待つことが大切です。

さらに友達に伝えたり後輩に教えたりすることで学ぶことも少なくありません。どれだけ理解できたのか、身についたのかが自分で確認できるだけでなく、相手の反応からより学びを深くする効果もあります。どうしたら伝わるかはコミュニケーションの力にかかっています。言語だけでなく、身振り手振りや絵を描くなど悪戦苦闘して悩み工夫することで人間関係を形成する力がついていきます。

このように「学ぶ」ことひとつとっても、正しい答えを最初から教えるのか教えないのかなどキャリア教育としてのアプローチの仕方が違います。誰だって好んで失敗などしたくはありません。「転ばぬ先の杖」というように事前に対策を練って将来に備えられることが一番です。そのためには「蟻とキリギリス」のような童話や、今回の津波被害のような歴史的教訓から学ぶ意味は大きいと思います。たった一人のたった一度の人生で体験できることは限られていますが、先人・先達の話や本で学べばそれを何倍も補強できます。

職場・施設を実際に見学して五感で知ったり、卒業生・保護者の体験談を聞いて参考になるところはすぐに取り入れるなどの学びは、できるだけ低学年のうちしておくほうがあとあと有利です。それも卒業後の進路や適性を見極めるという「進路指導」の視点ではなく、親子でこれからどういう人生を歩んでいくのか、親亡き後に備えて今からできること・しておかなければならないことは何か、地域や行政にいつどのように支援を求めていけばよいのか、といった「キャリア教育」の視点で学び、お子さんの日々の生活の中に反映できれば、お子さんも保護者の方々も、それぞれの掛け替えのない人生を精いっぱい生きていくことができると思います。来年は希望に満ちた良い年になりますように。